

Contents

特集：ヒラリー・クリントン今昔物語	1p
< 今週の”The Economist”誌から >	
”The tall guy from Tennessee” 「テネシーのでかいヤツ」	7p
< From the Editor > ヒラリー批判のCM	8p

特集：ヒラリー・クリントン今昔物語

来年の11月4日には、米国大統領選挙が行われます。本誌「大好物」のこの話題は、事実上のレースが年初には始まっていたにもかかわらず、これまでほとんど取り上げる機会がありませんでした。しかし投票日まで残り1年となり、緒戦のアイオワ州党員集会在来年1月3日に実施決定(2ヵ月後!)と聞くと、さすがに黙ってはいられません。

今週号では目下のフロントランナー、ヒラリー・クリントン上院議員を取り上げることとします。が、久しぶりに好きな話題を取り上げるだけに、いささか趣味的な書き方になってしまうことをお許しください。

先行逃げ切りは可能か？

今週10月28日、秋の天皇賞は武豊騎乗のメイショウサムソンが、圧勝して春秋の連覇を遂げた。競馬ファンでない読者のために説明すると、JRAを代表するG1レースを野球に喩えるならば、ダービーが甲子園、ジャパンカップが五輪大会、有馬記念がオールスターゲームといったところだろう。そして秋の天皇賞こそ、年間の頂点を決める日本シリーズと呼ぶにふさわしい。

東京競馬場芝2000メートルのこの舞台は、過去に幾多の名勝負を生み出してきた。強いてひとつだけといえば、競馬ファンは100人が100人、1998年のサイレンススズカの悲劇を挙げるだろう。6連勝で臨んだこのレースにおいて、同馬はブッチ切りの必勝態勢を築いたものの、第4コーナーで故障を発生し、予後不良から安楽死処分となった。その父の名を取って、「沈黙の日曜日」(サンデーサイレンス)と語り伝えられる事件である。

サイレンススズカの人気は、「大逃げ」というスタイルで勝つところにあった¹。ハナからトップを切り、他馬を大きく引き離し、なおかつ差し足を使うという華麗な勝ち方である。普通の馬は、むしろ序盤は体力を温存し、好位置を確保して、ラストスパートに賭けるものである。同じサンデーサイレンスを父とする名馬ディーブインパクトは、序盤は最後方に控え、ゴールを目前に「飛ぶ」と呼ばれる追い込みを見せて勝った。競馬としては、この方がオーソドックスな手法であって、序盤からリードを奪ってライバルたちの標的になるのは明らかに損なのである。

同じことが米国大統領選挙にも当てはまる。候補者が最初から絞り込まれているのならともかく、多数の候補が乱立しているレースでは、序盤から目立つのは得策ではない。他候補の攻撃を受けるばかりか、余計な資金も使わなければならない。なるべくなら「後だしジャンケン」の方がよく、「先行逃げ切り」は、できれば避けたい戦法である。

その点、知名度と経験で圧倒的な優位にあるヒラリー・クリントン上院議員は、好むと好まざるとに関わらず、レースの先頭に立たなければならない立場であった。”I’m in. I’m in to win.”とカッコよく出馬を表明したのが1月20日。それからずっと、支持率でも選挙資金量でも政策でも、他候補の後塵を拝することはなく、一貫して先頭を走り続けてきた。

毎度、この話題が出るたびにご紹介している話であるが、選挙戦の有利不利を知るもっとも手っ取り早い指標は選挙資金の量である。世論調査の支持率の数字は、「後にとっておけない」が、手持ち選挙資金だけは候補者を裏切らないからだ。

以下は2007年7-9月期までの選挙資金報告に見る有力各候補の台所事情である。これまでクリントン、オバマ両候補が激しい資金獲得競争を演じてきたが、第3四半期を終えた時点でリードは明らかとなり、手持ち資金量で5000万ドルと他を圧倒している。まして共和党候補は顔色なしといったところである。

選挙資金一覧表²

候補者	Q3 入金	Q3 支出	入金合計	支出合計	手持ち金額	負債
< 民主党 >						
ヒラリー・クリントン	\$27,859,861	\$22,623,680	\$90,935,788	\$40,472,775	\$50,463,013	\$2,347,486
バラク・オバマ	\$21,343,292	\$21,519,790	\$80,256,427	\$44,169,236	\$36,087,191	\$1,409,740
ジョン・エドワーズ	\$7,157,233	\$8,271,938	\$30,329,152	\$17,932,103	\$12,397,048	\$0
< 共和党 >						
ミット・ロムニー	\$18,396,719	\$21,301,756	\$62,829,069	\$53,612,552	\$9,216,517	\$17,350,000
ルディ・ジュリアーニ	\$11,624,255	\$13,300,650	\$47,253,521	\$30,603,695	\$16,649,826	\$169,256
ジョン・マケイン	\$5,734,478	\$5,470,277	\$32,124,785	\$28,636,157	\$3,488,628	\$1,730,691
フレッド・トンブソン	\$12,828,111	\$5,706,367	\$12,828,111	\$5,706,367	\$7,121,744	\$678,432

¹ ウィキペディアで「サイレンススズカ」を検索すると、情愛溢れる長文の解説記事を読むことができる。

² <http://www.opensecrets.org/pres08/index.asp?cycle=2008> というサイトがFEC(連邦選挙委員会)による公開データを紹介している。

現下のレース状況はいかに

気の早い向きは、「ヒラリー大統領」の実現可能性をはやし立て始めた。The Economist 誌は 10 月 6 日号で、Newsweek 日本版は 11 月 7 日号で、それぞれ表紙にヒラリーを登場させて米大統領選の行方を報じている。

最近の世論調査を見ても、民主党候補者の中では圧倒的なリードを示している。

民主党大統領候補者の世論調査³

Poll	Date	Sample	Clinton	Obama	Edwards	Spread
RCP Average	10/12 - 10/29	-	45.0	22.1	12.7	Clinton +22.9
Quinnipiac	10/23 - 10/29	742 RV	47	21	12	Clinton +26.0
Rasmussen	10/25 - 10/28	750 LV	44	21	14	Clinton +23.0
Zogby	10/24 - 10/27	527 LV	38	24	12	Clinton +14.0
FOX News	10/23 - 10/24	329 RV	42	25	13	Clinton +17.0
Pew Research	10/17 - 10/23	837 RV	45	24	12	Clinton +21.0
LA Times/Bloomberg	10/19 - 10/22	469 LV	48	17	13	Clinton +31.0
CBS News*	10/12 - 10/16	456 RV	51	23	13	Clinton +28.0

さらに大統領選挙の定番、「Intrade」（<http://www.intrade.com/jsp/intrade/contractSearch/>）を見ると、「2008.PRES.CLINTON」株がすでに 50 セント近くまで買われている。つまり電子市場で「命の次に大事なものを」を賭けている人たちは、確率 5 割でヒラリー・クリントン大統領誕生を予測しているということだ。

予想マーケット「2008 年、クリントン大統領誕生」



³http://www.realclearpolitics.com/epolls/2008/president/us/democratic_presidential_nomination-191.html

しかし、米国大統領選挙に「セーフティリード」はない。過去の歴史を紐解いても、「先行逃げ切り」のケースはあまり多くない。最悪、ヒラリーがサイレンスズカのように、劇的な失速状態に陥る可能性だってなくはないのである。

鍵を握るアイオワ州

「君は XX 候補のことをどう思う？」

「わからんね。僕はまだ 2 回しか会っていないから」

これは選挙の年になると、アイオワ州で流行するジョークである。黨員集会はアイオワ州、予備選挙はニューハンプシャー州が最初に行われる。ゆえに先行指標となる 2 つの州では、投票が行われるはるかに前から、有力候補が何度も足を踏み入れて選挙活動を行う。選挙好きな有権者の間では、文字通り上記のような状況が出現しかねない。

そのアイオワ州黨員集会は、全体の日程が前倒しになる中で、1 月 3 日という早い時期に行われることになった。そして 2 月 5 日には、多くの州が一斉に投票日を重ね合わせるスーパーチューズデーが行われる見込みである⁴。ということは、2008 年冒頭の実質 1 ヶ月程度で大統領候補が決まることになる。

かかる状況においては、ヒラリーを追う他候補はあらゆる資源をアイオワ州に投入せざるを得ない。ここで負けたら最後、逆転の目はほとんどないといっても過言ではないからだ。伝統的に労働組合が強い同州は、「庶民派」のエドワーズ候補がもともとリードしていたし、隣のイリノイ州出身のオバマ候補も精力的な活動で支持を伸ばしている。

10 月 29 日にアイオワ大学が行った世論調査では、民主党の有力 3 候補の人気は 2 割台で接近している。

ヒラリー・クリントン	24.8% (8 月)	28.9% (10 月)
バラク・オバマ	19.3% (8 月)	26.6% (10 月)
ジョン・エドワーズ	26.0% (8 月)	20.0% (10 月)

なにしろアイオワ州といえば、前回の 2004 年民主党予備選において、ハワード・ディーン元バーモント州知事が 30p 差をひっくり返された前例がある。直前までほとんど「死に体」状態であったジョン・ケリー上院議員は、巨額の選挙資金を投入して 38% を得票し、指名獲得へと大きく踏み出した。圧勝の構えであったディーンへの支持はわずか 18% に留まり、急速に失速してレースから退場することになる。

⁴ 9 月現在、カリフォルニア州やニューヨーク州を含む 20 州が予備選挙の実施を予定しており、「Giga Tuesday」もしくは、「Super Duper Tuesday」などと呼ばれている。

2008年大統領選挙においても、2ヵ月後のアイオワ州党員集会在、生き残りゲームの最初の山場ということになるだろう。

ヒラリーが知る大統領選の鉄則

ここでふと重ね合わせたいくなるのは、16年前の大統領選挙のことである。

1992年、米国は一種の自信喪失状態にあった。湾岸戦争で鮮やかな勝利を収めたものの、経済は不振を極め、リストラは中間層にも及んだ。コロンビア・ピクチャーズやロックフェラーセンターが日本企業に買収され、「冷戦に勝ったのは日本ではないか」という怒りの声が湧き上がった。ロサンゼルスで黒人暴動が起き、平凡な男が逆ギレして大暴れする映画「フォーリング・ダウン」がヒットしたのもこの頃である。

この年の大統領選挙は当初、盛り上がらなかった。第41代のブッシュ・シニア大統領の再選は濃厚だと思われていたので、民主党の大物候補は次々と出馬を見送った。敢えて名乗り出た候補者は、いずれも小粒に見えた。「6人の小人」と揶揄された候補者の中には、まだ無名だったアーカンソー州知事のビル・クリントンがいた。当時、噂されていたのは、「ニューヨーク州知事のマリオ・クオモが出馬するだろう」ということであり、まだ40代半ばだったクリントン夫妻は、「今回は練習のつもりで」と語り合っていた。

しかし、クオモの出馬はなかった。図らずもクリントンは「6人の小人」の中でトップランナーに踊り出る。ところが、2月のニューハンプシャー州予備選を目前にして、クリントンは女性関係や徴兵逃れ疑惑などのスキャンダルに見舞われる。「州民全員と握手をする」覚悟で乗り込んだ選挙戦において、クリントンは価値ある2位を獲得する。次なる戦場である地元・南部に戻ったクリントンには”Comeback Kids”(復活小僧)というあだ名が冠せられた。しかしその後の道のりも、容易なものではなかった。

存在感を示せず、選挙資金不足にも苦しんだクリントン陣営は、マイクロバスで選挙区を駆け回る、あるいは深夜番組に出演してサクスを演奏するなど、捨て身の選挙戦術に打って出た。今日では、バスを使う選挙戦術は、ローカル・メディアの注目を集める「常套手段」になっているし、深夜番組への登場も無党派層に浸透するために有効な手段であることが知られている⁵。が、これらはすべて必要に迫られた「弱者の戦略」であった。

クリントンの回顧録『マイライフ』を読むと、1992年の挑戦がまるで最初から勝ち目があったかのごとく明るく書かれている。しかし、当時をよく知る者は皆、それがほとんど絶望的な戦いであったことを知っている。『マイライフ』の中では、「1992年4月当時、英国のブックメーカーによるクリントン当選のオッズは34倍だった」ことがさらりと書かれている。おそらく2月時点にさかのぼれば、文句なしの「万馬券」であっただろう。

⁵ カリフォルニア州知事選挙に出馬した際のアーノルド・シュワルツェネッガーは、選挙資金にはまったく困らなかったにもかかわらず、これらの戦術を模倣している。

それでも、クリントンが第 42 代大統領に就任し、2 期 8 年の任期を全うしたのはご存知の通りである。この間、富豪候補ロス・ペローの参戦や、景気の失速による現職ブッシュ大統領の人気低下など、いくつもの偶然に恵まれたことは間違いない。が、とにかく 1992 年の選挙は「万馬券」であった。

16 年前の長くて辛い選挙戦と比べれば、今回のヒラリー・クリントンは文句なしの本命候補として選挙戦に臨んでいる。その思いはいかばかりだろうか。簡単に勝てる戦いでないことは、誰よりも彼女自身が良く承知していよう。なにしろ 16 年前には、自分たちが勝ち目のない戦いに挑み、勝利を手に入れているのである。何が起こるか分からない。それこそが米大統領選挙における鉄則である。

次なる転換点となる 2008 年

1992 年と 2008 年で重なり合うもうひとつのポイントは、米国が路線転換を必要としていることだ。

1991 年 12 月、ソ連邦は崩壊して冷戦の終了は誰の目にも明らかになった。政治の焦点は「軍事から経済へ」と切り替えなければならなかった。この転換点を、ビル・クリントン大統領は見事に乗り切ってみせた。1990 年代は、世界経済のグローバル化と IT 技術の発展により、「米国の一人勝ち」と呼ばれる時代となった。それはかならずしも政治のお陰ではなかったにせよ、米国再生のきっかけになったのが 1992 年の大統領選挙であったことも間違いない。大統領が変わると、国全体が変わるのがこの国の流儀なのである。

イラク問題に手を焼き、国際的にも孤立している現在の米国は、16 年前と同じような閉塞状態にある。サブプライム問題に関する経済や金融の混乱も、先行きはなかなか手ごわそうに見える。「米国は衰退の道をたどるのではないか」といった声を聞く機会も増えてきた。

しかし、それはまさしく「いつか来た道」である。米国政治には 4 年に 1 回、「ご破算で願いましては……」の機会がある。2008 年 11 月 4 日の大統領選挙投票日に向けて、多くの候補者がしのぎを削り、米国再生に向けての論戦が展開される。厳しい選挙戦を戦い抜いた勝者は、たとえどんな人物であったとしても、指導者として最低限、必要な体力と運を有しているはずだ。そして 2009 年 1 月 20 日に誕生する発足する新大統領は、ヒラリーであれ、他の誰であれ、大胆な方向転換を目指すことになるだろう。

米国が超大国であるゆえんは、柔軟に変化できる能力を備えていることだ。2008 年の大統領選挙は、またも大きな転換点になるだろう。変化の中身までは見えてこないが、ひとつだけ確実なのは、そのとき世界は大慌てするということである。外国人であるわれわれが、米国大統領選挙に注目しなければならない理由は、まさにその一点に尽きている。

<今週の”The Economist”誌から>

”The tall guy from Tennessee”

「テネシーのでかいヤツ」

United States

October 13th 2007

*** ディープインパクトになれるのは誰か？ 共和党候補者の中で、いちばんの爆発力を秘めていそうなフレッド・トンプソンを”The Economist”誌が評しています。**

<要旨>

「トロいけど、いいヤツ」 30年前、ニクソンは若き弁護士時代のトンプソンをこう評した。大統領候補者になった今も同じ。ワシントン雀たちは、共和党のライバル候補に比べて一枚落ちと認めている。初の討論会は無難に乗り越えたが、まだまだ次がある。

たとえ有能でも、他の候補者たちは共和党の支持基盤に訴えるものがない。ジュリアーニは中絶賛成、ロムニーはモルモン教徒、マケインは年寄りでキリスト教右派に辛らつだ。社会政策と財政で保守的、勝ち目のあるレーガンのような候補者が求められていた。

トンプソンはレーガン同様、俳優としての魅力がある。背が高く、声が太く、映画で偉い人物を演じたことがある（大統領も3回ある）。人気テレビ番組『法と秩序』の怖い検事役でお馴染み。田舎者の魅力と保守的な本性がある。が、似ているのはそこまでだ。レーガンはカリフォルニア州知事を2期務め、1976年には現職フォード大統領を破りかけた。トンプソンの政治履歴はもっと薄い。1994年から2003年まで上院議員を務めた。選挙運動は目覚しかったが、ワシントンは疲れる場所だと知った。減税や軍拡や福祉改革を語り、賛成票を投じはするが、法案成立に汗をかいたりしない。

ライバルに比べても見劣りがする。マケインは戦争の英雄であり、移民法や虐待禁止の権威。ジュリアーニは米国最大の都市を犯罪と機能麻痺から救った。ロムニーは会社2つ、冬季五輪、州の経営に成功した。3人とも情熱家だが、トンプソンはわが道を行く。

出自は慎ましい。父は中古車のディーラー。高校時代に「できちゃった」婚。ロースクールを出て、親戚の法律事務所へ。弁護士としては優秀で、共和党政治に首を突っ込む。

次なる幸運はハリウッドの注目を集めたことだ。映画出演を求められ、俳優としても優秀であると分かった。俳優業とロビイストと政治で稼ぎ、多くの人に愛された。

大統領選挙は草の根保守派の声から始まった。しばし瀬踏みをし、ラジオで政治を語ったところ、すぐにネットで反響があった。マイケル・ムーアに向かって、「君が好きなキューバでは、映画監督は精神病院に監禁されるらしいよ」と言ったこともある。

共和党予備選ではジュリアーニに次ぐ2位である。最初の基調演説は散漫で退屈。政策への理解も大まか過ぎた。他候補との違いを聞かれて、「彼らを良く知らないから」と答えた。友人たちも痛ましいと言う。「いやしくも大統領選なのに」。

しかし最近では振る舞いも改善してきた。反税会議ではブッシュ減税継続、企業減税、福祉支出削減などを語り、拍手も笑いも取った。次の討論会では周到に準備をし、大きなへまはなかった。カナダ首相の名前は苗字だけを答え、堂々と自由貿易を擁護した。

南部出身の看板は今後も有効だろう。「民主党が金持ちを狙い始めたら、中間層は急いで逃げろ。撃たれるよ」などと笑いを取る。まことに結構だが、他候補からの攻撃はますますキツくなる。ヒラリーに勝つには、トロクはないところを見せる必要がある。

< From the Editor > ヒラリー批判のCM

今年の春頃に出回っていたので、いささか旧聞に属するかもしれませんが、オバマ陣営が作ったヒラリー中傷ビデオが面白い。ちゃんとユーチューブに残っておりました。題して「ヒラリー1984」。

<http://www.youtube.com/watch?v=FJklyhWniDQ>

その昔にマッキントッシュが作ったCMのパロディ作品です。ジョージ・オーウェルの『1984年』のような未来世界で、ヒラリーが独裁者「ビッグブラザー」を演じている。その演説の様子はまるで「学校の怖い先生」のよう。皆がマインド・コントロールされている中を、ひとりの革命家が現れてスクリーンを破壊し、人々を救出する。右から叩かれることの多いヒラリーですが、これは左から批判されているケースです。

民主党にとって1984年といえば、モンデールがレーガンに地滑り的な大敗を喫した悪夢のような年です。モンデールの地元ミネソタ州と、ワシントンDC以外のすべての州を共和党に取られてしまった。しかも、このときの副大統領候補は、米国史上初の女性候補であったフェラーロ女史。「民主党の候補者をヒラリーにすると、1984年の再来になる！」というのは、ものすごいブラックジョークなんですね。

こんな強烈な中傷合戦を、かれこれ10ヶ月も続けているのですから、いかに大変な戦いかということです。こうした「名作」はほかにもたくさんあるでしょうし、これからも数多く生産されることでしょう。

毎度のことながら、インターネットの普及は選挙戦を変えつつありますが、今回の選挙戦ではユーチューブをチェックする機会が増えそうです。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL: (03)5520-2195 FAX: (03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com